

シンポジウム I

「多職種連携でつむぐ放射線看護」

Interprofessional collaboration for radiological nursing

菊地 透¹ 野戸 結花²

Toru KIKUCHI¹ Yuka NOTO²

1 原子力安全研究協会

2 弘前大学大学院保健学研究科

1 Nuclear Safety Research Association

2 Hirosaki University Graduate School of Health Sciences

放射線看護は多様な領域の放射線・原子力利用において、放射線被ばくの対象となる人々に対して放射線防護および放射線リスクコミュニケーションの専門知識を基盤として、安心・安全の確保のための支援を行う役割を担っている。そのため、各専門領域との連携は必須である。本シンポジウムでは、放射線看護と他領域の学問分野・実践との連携について4名のシンポジストからご報告をいただき、放射線看護学の構築について考える機会となった。

角美奈子氏（がん研有明病院）からは「多職種連携でつむぐ放射線看護—放射線腫瘍医の立場から」というテーマでご発表頂いた。放射線腫瘍医として看護師に期待する連携は、患者個々の状況に応じた有害事象の査定とケア、セルフケア支援であり、各部署のそれぞれの専門職者とのコミュニケーションと情報共有が重要である旨が述べられた。さらに、放射線治療の現場におけるキーパーソンは看護師であり、専門職者としてリーダーシップの発揮を期待したいとのエールをいただいた。奥野浩二氏（長崎大学病院医療技術部放射線部門）からは「原子力災害における放射線防護への取り組み」とのテーマで、原子力災害医療における医師や看護師、診療放射線技師等によるチーム医療においては、各専門職種で業務を分担しつつ連携・補完し合う協働医療の考え方が必要となること、その場合、お互いの専門性の理解と信頼、コミュニケーションが重要であることが述べられた。また、原子力災害時に住民の不安に最前線に対応できるのは保健師・看護師であること、そのためには放射線に関する知識を持ちリスクコミュニケーションができる人材育成が急務であると結ばれた。三浦浅子氏（福島県立医科大学看護学部 附属病院看護部）からは「がん看護専門看護師活動から考える多職種連携でつむぐ放射線看護」というテーマでお話をいただいた。三浦氏は附属病院看護部にてがん看護専門看護師としての活動をされる傍ら、放射線看護専門看護師（仮称）の教育にもご尽力され、その臨床実習を通して放射線治療を受ける患者の看護における同職種並びに多職種連携の重要性について述べられた。さらには、がん看護専門看護師から見た放射線看護専門看護師（仮称）の専門性および放射線看護の未来についてもご示唆を頂いた。吉田浩二氏（長崎大学大学院医歯薬学総合研究科）からは「実践—研究—教育でつむぐ放射線看護」のテーマで、自身の看護実践経験から研究への発展、さらには教育へと、3つの歯車が連動した一連の活動か

ら放射線看護学の発展に寄与されている内容が述べられた。看護職が他職種との相違性を意識し、自身の専門性を知ることが連携に重要であると結ばれた。

放射線看護の専門性の確立は本学会にとっても大きな課題である。これまではどちらかと言えば日の目を見ることがなかった放射線看護であるが、スタートラインから長い時を経て、近年では、日本看護系大学協議会で専門看護師の教育課程として認められたこと、看護学教育のモデルコアカリキュラムで放射線看護に関する教育内容が明文化されたことも追い風となり、今まさに、他領域からも認められる専門性を確立するために、専門性の高い実践と、学問としての確立のための研究、そして系統的な放射線看護教育を作り上げていく時期に来ている。本シンポジウムに参加した方、ひとりひとりの行動や立場や思いを「つないで、つむいで、放射線看護学をおりなしていく」ことを期待したい。